

歌曲にみる異文化へのまなざし——H. ヴォルフの歌曲を中心に

Insights into Other Cultures in Vocal Music: The Songs of H. Wolf

高木彩也子 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

Abstract

One of the great lied composers from the era of German Romanticism, Hugo Wolf (1860–1903) composed his Spanish Song Book and Italian Song Book in succession, using the texts of Spanish and Italian poems translated into German. Regarding Wolf's own interest in southern Europe, he stated that he chose foreign poetry because of the popularity of translated foreign literature in Germany at the time. As his mother demonstrated southern Europe family traits, Wolf's strong admiration for a radiant southern country is evident in both these works, along with a feeling of freedom, and cross-cultural exchange, embodied in the music's exotic rhythm, melody, and harmony.

I performed at that concert, while maintaining the focus of the pieces from these books, additional pieces by other composers could be included, which shared the ideas of these cross-cultural works.

ドイツ・ロマン派歌曲の大家であるフーゴー・ヴォルフ (1860 - 1903) は晩年、南欧をテーマにした歌曲集《スペイン歌曲集¹⁾》《イタリア歌曲集²⁾》を相次いで発表した。ヴォルフが異国の詩に興味を持ち作曲するに至った背景には、当時のドイツにおいて外国文学の翻訳が流行していたこと、更には母親が南欧系の血を引き継いでいたこと³⁾などが挙げられる。これらの作品には異国情緒漂うリズムや旋律、和声が頻繁に使用されており、彼の他の歌曲集には類を見ない独創的な作風からは、南欧の明るさ、解放感に対するヴォルフの強い憧憬が窺える。今回のアフタヌーンコンサートでは自身が研究を重ねてきた「歌曲」に焦点を当て、国際シンポジウムの全体テーマである「異文化へのまなざし」に基づき、上記の2つの歌曲集を中心とするプログラムを構成した。

プログラムの前半では、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (1685 - 1759)、フランツ・シューベルト (1797 - 1828)、フェリックス・メンデルスゾーン (1809 - 1847) の3人の作曲家を取りあげた。いずれも彼らが「異文化」から着想を得た作品を選曲した。まずヘンデルのオペラ《アリオダンテ⁴⁾》より第1幕ダリンダのアリアを演奏した。このオペラは16世紀のスコットランド王宮が舞台となっており、当時の音楽家たちに影響を与えたルネサンス期イタリアの長編叙事詩『狂えるオルランド⁵⁾』が原作となっている。この物語に魅了されたヘンデルは、この原作に基づくオペラをあと2つ残している⁶⁾。シューベルトの作品からは、〈ズライカI〉を

選曲した。詩はヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749 - 1832) の『西東詩集—ズライカの巻⁷』から取られており、ズライカの切なる恋心が歌われている。詩の中で「東風」は想いを届ける使節の役割を担っているが、シューベルトはこの東風をピアノ伴奏に演じさせており、彼女の心情に合わせて頻繁に転調を続けながら全曲にわたり吹き続ける。円熟期のシューベルトの巧みな手法が光る作品である。また前半の最後には、ロマン派の東洋志向が色濃く反映されたメンデルスゾーンの〈歌の翼に⁸〉を取りあげた。

各作曲家の作品を時代ごとに演奏した後、後半ではヴォルフの《イタリア歌曲集》全46曲から4曲、《スペイン歌曲集》全44曲から3曲を各々抜粋し演奏した。《イタリア歌曲集》はイタリアの日常生活や恋愛が中心的テーマとなっており、それらの人間ドラマをヴォルフは精微かつ劇的な技法により見事に描いている。また《スペイン歌曲集》ではスペインの舞踏のリズム、ギター風の伴奏など民族的色彩を多用することで、スペインの民衆の情熱的で官能的な愛を描いた。両作品とも詩の内容から男声、女声に適するものがそれぞれあるが、今回は全て女性が主人公の詩を選んだ。ヴォルフが描く女性像は他の歌曲集においても常に魅力的であるが、南欧に生きる女性たちに焦点を当て演奏することで、とりわけヴォルフが抱いていた南欧の女性に対する独特な感性が浮き彫りとなった。

今回の演奏を通し、各作曲家が「異文化」をどのように捉え、作品に投影していったのかを感じることができ、自身の研究を再考する上でも大変良い機会となった。



高木彩也子氏 (ソプラノ・右) と青木園恵氏 (ピアノ・左)

[注]

- ¹ 1889～91年にかけて作曲。パウル・ハイゼ（1830 - 1914）とエマヌエル・ガイベル（1815 - 84）がスペインの有名・無名の詩人たちの詩を独訳した詩集『スペインの歌の本』から、44編を選んで作曲した。この歌曲集は第一部「聖歌曲集」、第二部「世俗歌曲集」に分かれている。
- ² 1890～91年、1896年にかけて作曲。同じくハイゼが独訳してまとめた詩集『イタリアの歌の本』から、全46編の恋愛詩を選び作曲した。
- ³ 母カタリーナはスロヴェニア出身であるが、彼女の祖先にはイタリア人も数人いたことが分かっている。
- ⁴ HWV33。ヘンデルがイギリスに帰化したのち、オペラ作曲家として成功を収めていた1734年に作曲。台本作家は不明。
- ⁵ ルドヴィーゴ・アリオスト（1474 - 1533）による全46歌、3万8736行に及ぶ長編叙事詩。恋に狂った英雄オランダの物語が中心となっているが、インドや中国、イスラム教徒が登場するなど異国の魅力に溢れた独特な世界観は、バロック期の数多くの音楽家に影響を与えた。
- ⁶ 《オルランド HWV31》（1733年作曲）、《アルチャーナ HWV34》（1735年作曲）。
- ⁷ この「ズライカの巻」は、老年のゲーテが旅先で恋に落ちた人妻マリアンネとの恋愛経験が元となっている。彼はこの中で、自身を東洋詩人「ハーテム」、マリアンネを「ズライカ」と名付け、互いの叶わぬ想いをハーテムとズライカの愛に喩えて歌った。また、このズライカⅠとズライカⅡの詩は、ゲーテ本人の作品ではなくマリアンネによるものである。
- ⁸ 1834年に書いた《6つの歌曲》の第2曲目。詩はハインリヒ・ハイネ（1797 - 1856）の詩集『歌の本』の中の「叙情挿曲」からとられている。当時はおとぎの国と考えられていた遠い東洋の国インドに、恋人である君を連れて行こうとロマンティックな歌詞が、アルペジオの伴奏と優雅で憧れに満ちた旋律によって歌われる。